

子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

News Letter

Vol. 10

1999. 3. 10

キャプナ ニュースレター

発行：子どもの虐待防止ネットワーク・あいち 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404 TEL/FAX 052-232-2880



CAPNA 事務局に、このほど最新鋭のパソコン2台が登場しました。

CAPNA が社会福祉・医療事業団の子育て支援基金の助成を受けて、虐待データベース構築事業に、本格的に取り組むようになったためです。これを機に、パソコン技術習得に取り組むメンバーも増えました。

ほかにも、NPO 法人格取得の準備、2000年12月に名古屋で開く子どもの虐待防止研究全国大会への企画づくりなど、これまでになかった仕事が目白押しです。

社会の信頼度と比例して、私たちの責任も大きくなっていきます。

98年は131人が死亡！

CAPNAが昨年11月に出版した「見えなかった死—子ども虐待データブック」は、大きな反響を呼びました。紹介記事を掲載していただいた新聞社は全国20紙以上。北海道や九州からも、本の注文の電話が相次ぎました。子どもの虐待死の実態をさらに調べていくために、私たちは社会福祉・医療事業団の子育て支援基金の助成を得て、虐待死データベースの作成を進めています。そして、98年のデータを最近、集計したところです。その結果、全国で131人が亡くなっていること、愛知県が96年に続いてワースト1になったことが明らかになりました。そのデータの一部を紹介します。詳しい資料が必要な方は、CAPNA事務局へお問い合わせください。

【急増する無理心中】 98年に亡くなった131人の内訳は、無理心中72人（55%）、せっかん29人（22%）、ネグレクト16人（12%）、発作的殺人14人（11%）となっています。グラフ1は、過去3年間で虐待死した子どもの数を種類別に比較したものです。98年は無理心中がすごい勢いで増えていることが分かります。

【愛知がワースト1】 都道府県別（グラフ2）を見ると、愛知県が12件（死者15人）で最も多く、以下、大阪府、神奈川県、埼玉県、東京都と続いています。若年人口の多い地域で発生が多くなるのはやむをえない面もありますが、それにしても愛知の多さはどうしたことでしょう。

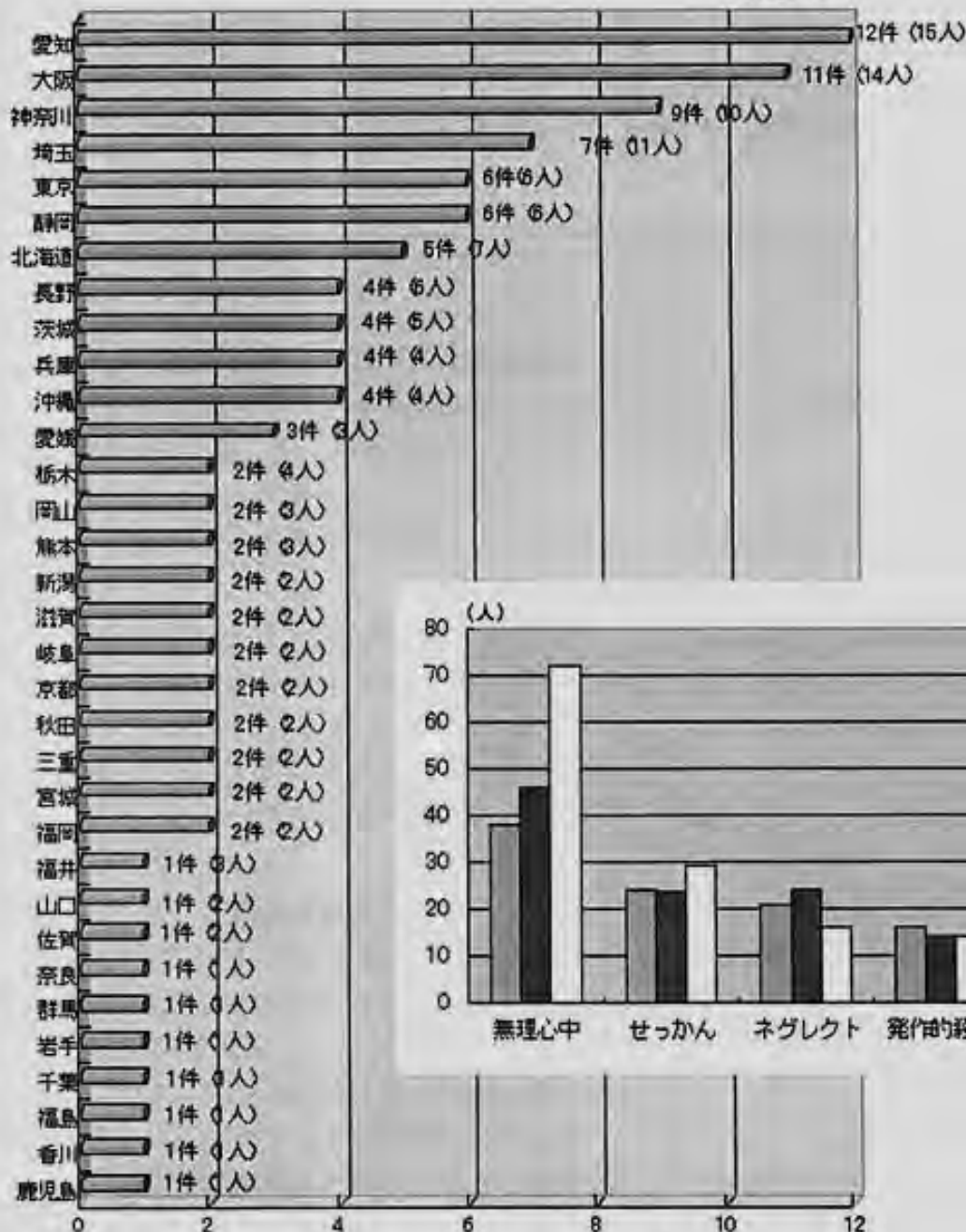
過去3年間の総計でも、愛知県は30件に達し、東京都（25件）や神奈川県（24件）を引き離してワースト1になっています。

【4歳以下が6割】 被害者を年齢別にみると、乳児（新生児を除く）が21人で最も多く、1歳児15人、3歳児14人、2歳児と4歳児各11人と続いている。新生児（8人）を合わせると、被害者131人の61%にあたる80人を4歳以下が占めています。また、被害者からみた加害者の続柄は、母親が63人、父親が51人、その他10人となっています。虐待の問題は、母親の暴力の側面が強調されやすいのですが、父親もかなりのウエイトを占めていることが分かります。

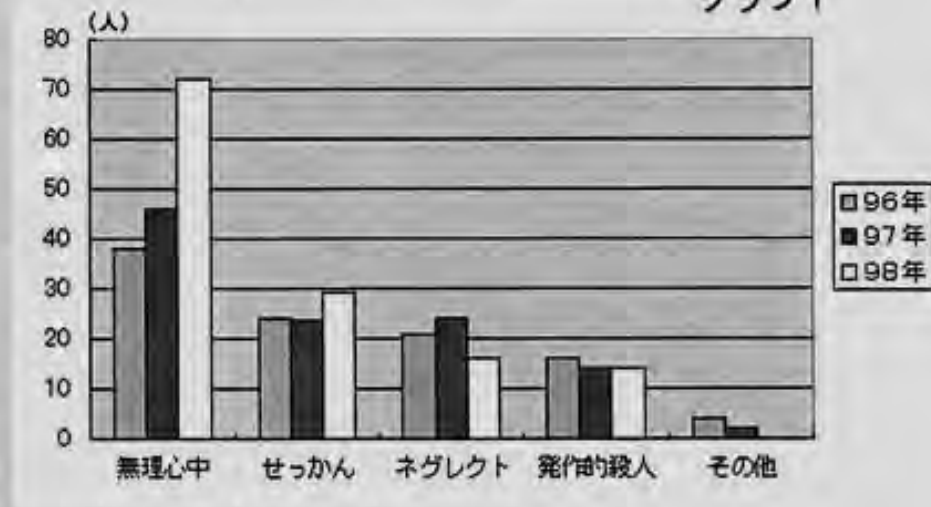
【7月に多い】 96年から98年のデータを比べたところ、虐待死の多い月は7月(37件)で、以下、8月(27件)、1月、6月(各25件)、2月、12月(各24件)と、夏と冬に事件が多い傾向がくっきりと出ました。最も少なかったのは9月(11件)でした。

【96年も100人台に】 「見えなかった死」の中では、96年に86人が死亡、97年に104人が死亡と掲載しました。しかし今回、検索する新聞データベースの数を増やしてさらに調査したところ、地方の小さな事件が次々に掘り起こされ、総計では96年は103件、97年は110件となりました。

グラフ2



グラフ1



看護学生が見たもの

名古屋市港区の中部労災看護専門学校では昨年末、「見えなかった死」をサブテキストに、小児看護学の講義を行いました。子どもと接することなど、ほとんどない学生たちです。ましてや「子ども虐待」など、彼女たちは考えたこともありません。驚愕、悲しみ、憂い・・・様々な反応がありました。年が明け、小児病棟や保育園の実習を体験している彼女たちに、あらためて「見えなかった死」を振り返ってもらいました。実際に子どもやその母親に触れる中で、彼女たちは何を感じ取ったのか？何が見えたのか？みなさんにお知らせしたいと思います。

(中部労災看護専門学校 小児看護学担当 妹崎加奈子)

殴りたい気持ち

実際に子どもが泣いていると殴りたくなることがある。

泣く理由などどこにもないではないか・・・と、自分の基準で判断してしまう。だから腹が立ってくる。それに自分が子どものためにしていることを、子どもに受け入れてもらえないと傷ついたりする。自分の中にも「子どもを殴りたい」と思う気持ちが潜んでいることがわかった。

「虐待してしまうかもしれない」という危険性が自分たちの中にもあるって事を知ることが、虐待を防ぐ一番の方法なのかもしれないと思った。「見えなかった死」には、残酷で冷酷で特別な親のことばかりが載っているんじゃないってことが今頃わかった。

何も言えない人たち

この本を読んで、とにかく驚いた。こんなこ

とが現実の世の中にあるんだと思うと怖い。

でも、近所に子どもの泣き声がしょっちゅう聞こえてくる家がある。家の中で何が起きているんだろうと思うんだけど、その家の「しつけ」かなあと思うと何も言えなくなる。

「見えなかった死」の中にも近所の人気づけば、命が救えたかもしれない事件が載っている。家の中のことは、みんな隠してしまうのがよくないと思うんだけど、私みたいに何も言えない人たちがたくさんいるんだと思う。

消えない記憶

子どもの時、保母さんに「いうことを聞かないんだったら、その滑り台から飛び降りなさい！」と叱られたことがある。その時の保母さんの怖い顔がいまも鮮明に残っている。

大人からいわれたことで怖かったこととか、給食のときひとりぼっちだったこととか、寂

しいことや悲しい場面って、なぜだか不思議に記憶に残っていることがある。だから本の中のお父さんに刺されそうになった子どもは、こんなにひどい目に遭ったんだから、絶対大人になってもその心の傷が残っていくと思う。

死んでからでは遅い

虐待のことがワイドショーなんかでとりあげられているけれど、子どもが死んでからようやくニュースにとりあげられるのが変だと思う。この本も虐待死のことをまとめた本だけど、これがすべてじゃないというのが怖い。死んではいけないけど、今も虐待を受けている子どもがいることが怖いと思う。

殴ることだけじゃない

この本とか、授業で「虐待」というのが殴ることだけじゃないと知った。病棟の子どもたちをみていると母親との関係とか、その家族の生活のあり方とか、子どもの病気をつくっていると思うことがある。インスタントの食品ばかり食べさせてたり、子どもが熱で苦しんでいるのに、タバコを吸いにいったきり戻ってこないおかあさんがいたり・・・。

自分の時間を大事にするっていうことも大切だけど、何かがおかしい。子供を持つ事って、女にとって不利なことなんだろうか？どうして私だけがこんなに我慢しなくちゃいけないの？って、そう思うことなのかな？子どもなんかいないって思っちゃう。

悲しい連鎖

おばあちゃんが48歳で、母親は28歳。受け持ちの子どもは4歳なんだけど、実はそのおばあちゃんにも8歳の子どもがいて、やっぱり入院してる。おばちゃんとそのお母さんを見てると、汚い言葉でどなったり、すぐ子どもをたたいたりして、そっくり同じ事を子どもにしている。

やっぱり育てられた方法でしか、子どもを育てられないのかなあと思う。本の中で子どもを殺してしまった親たちも、親から同じ事をされて、たまたま今生き残ってるんだとしたら、なんだか悲しくなる。

結婚って何だろう

本の中に、社会から期待される妻とか母の理想の姿っていうのが説明されてて、それが虐待を生む背景になってるかもしれないとあった。

私は結婚することにすごく憧れてるし、結婚するんなら良妻賢母になりたいと思うんだけど、そのことが自分や子どもも縛ることになって、虐待してしまうかもしれないなら結婚するのは怖い。それに、やっぱり子どもってお父さん、お母さんそろって何かの影響を受けるはずだから、二人の生き方が問われると思う。

そう考えると結婚てなんだろう？って思ってしまう。虐待は親子の問題だけじゃなくて結婚の問題でもあるんだと思った。

虐待の事実を知ることが、まずは虐待防止につながっていくはずです。次の世代の「母親」になる彼女たちだからこそ、そのことを伝えていきたいと思いました。みなさんはどう感じましたか？

あなたにとどけ

娘が二歳の頃、今から二年前の春のことです。友達と約束して、車で大きな公園に行きました。同じ年頃の子どもと楽しく遊び、帰りの時間になっても、まだ遊び足りない娘は、泣きぐずり始めました。なだめすかしながら車に乗せましたが、まだ泣いて暴れていました。そのうち持っていたジュースを車の中にぶちまけてしまい、それが私の我慢の限界でした。

気づいたら、娘の両ほっぺを叩いていました。それも手の跡が付くぐらい。娘は泣きながら、車の中で眠ってしまいました。私はというと、一瞬の感情を娘にぶつけてしまった自分への怒りでいっぱいでした。信号待ちで、横で泣き寝入りした娘の顔を見たとき、その感情が今度は悲しみでいっぱいになり、「あなたも悲しかったんだね。ごめんね」とつぶやいていました。

少しずつ変わっていったら…

中村 ゆり子



そんな頃、CAPNAの電話相談員養成講座の募集が、新聞に載っていたのです。娘を叱っているとき、感情で叱っている私がいて、「これではいけない」という想いや、つい叩いてしまって「これは虐待!？」という不安がずっとあった私は、CAPNAに関わることによって、それを確かめ、考えていけたらと思って応募しました。

それから二年数ヶ月、養成講座を経て、実際に電話を受けるようになった現在、以前のような悶々としたものはなくなったものの、やはり感情で叱ったり、時として叩いてしまったりしてしまいます。そんなとき、四歳になった娘が「ママ、虐待!! CAPNAに電話する!」と言うようになりました。普段、私がどういう勉強をしているか話したり、電話ごっこをしているので、そういう言葉が出るのでしょう。

人は変わろうと思っても、なかなか変われないものだと実感していますが、時間をかけて少しずつでも変わっていったらいいのではと思っています。私も子どもとともに。

癒しのメディア目指したい

全国不登校新聞記者 多田耕史さん

教育と不登校について考える全国不登校新聞（98年5月創刊）は、私たちCAPNAの友好団体の一つだ。CAPNA弁護団の中心メンバーである多田元弁護士は、不登校新聞の名古屋編集局長を兼ねており、長男の耕史さんが、多忙な父親を助けて取材や執筆に飛び回っている。自らも不登校体験者である耕史さんにインタビューした。

（CAPNA 広報担当：社会福祉士 水戸憲一）

—基本的な質問ですが、不登校とは具体的にどんな状況なんですか。

「不登校」という呼び方と「登校拒否」という呼び方があるけど、家庭の事情や病気などで行けなくなった場合もあるから、不登校というのは、「学校に行っていない状態の総称」だと思います。そのなかに登校拒否というものも含まれますね。これは、学校に行くことがイヤな場合かな。

—不登校を主題とした新聞ができてしまうぐらいだから、世の中も変わってきましたね。「学校なんか行くな」という親もいるし。

ぼくが子どもの頃は、学校に行かないというだけで、なんだか社会的に落ちこぼれているような感じだったんですけど、今は、「不登校」も子どもにとってひとつの選択肢になっています。不登校新聞は、不登校を経験している人だけに読んでもらおうというものじゃなくて、学校に行っていない子どもを持つ親や学校の先生たちにも読んでもらいたいものですね。

—不登校新聞ができた経緯を聞かせていただけますか。

東京シューレで活動している奥地圭子さんが、オヤジ（多田元弁護士）に相談したところ、不登校に関する新聞を出すことになったんです。そこで、多田法律事務所が名古屋支局となったんですが、ぼくがスタッフとして呼びかけられたけど、自分としては「不登校」は卒業したと思っていたので、新聞を作ることに對して違和感がありました。

—耕史さんも新聞を作るために教育問題などを勉強されたんですか。

いや、もともと、教育問題に関心はなかったし、学校に行っていなかったから、学校に行かないことを仕事にするつもりはなかった。事務的なことなら手伝ってもいいと思っていたけど、やっているうちに記事を書くことになったし、親の会とかに取材に行くことになった。なんで、こんなことやるようになったのか、わからないと思うことがよくありますね。



—新聞を作るうえで苦労したことは。

ぼくは文章もうまくないし、限られた字数で、どれだけ自分の書きたいことを表現できるか、反対に、書くことがなくて困ったこともあります。それと、新聞が発行されてから、電話の応対や購読の問い合わせが多くなっちゃって。法律事務所の事務も兼務しているので、法律事務所に鳴った電話と不登校新聞に鳴った電話のどっちをとればいいのかわからなかった。最近では、不登校新聞の編集をアルバイトしたいとか、ボランティアをやりたいという人もいますが、場所が法律事務所ということもあって、プライバシーに関する問題もあり、なかなか手伝ってもらえないのが悔しい。早くNPO法人格をとって事務所を確保したいです。

—CAPNAもNPO法人格を申請する予定です。耕史さんがCAPNAの活動に関わった理由を教えてください。

オヤジから頼まれて、創立の頃から手伝っているけど、暁学園のログハウスで電話相談のテストにつきあったり、1周年記念で斉藤学さんの講演を聞いたりしているうちに、自分もAC（アダルト・チルドレン）だということがわかってきた。ぼくの場合、学校でのイジメ体験がトラウマとなっているし、育児不安を抱えるお母さんたちや虐待を受けたサバイバーの人たちと一緒に癒しを模索していきたいですね。

—ご声援ありがとうございます。最後に、不登校で苦しむ子どもたちにメッセージを。

ぼくも偉そうなこと言えないし、絶対に大丈夫とも言えない。でも、不登校をやっていると犯罪者や浮浪者になるという迷信みたいなものがあるけれど、オヤジの調査によると、実際はそうじゃないみたいです。不登校新聞に読者の欄があるんですけど、やっぱり新聞というメディアを通して、同じ悩みを持つ仲間が繋がっていくのがいいですね。

全国不登校新聞

(ホームページ <http://www5.tokyoweb.or.jp/ftk/>)

毎月1日、15日発行(郵送)。

定期購読を希望の方は、購読料1年分(24回発行分)9,600円または半年分(12回発行分)4,800円を、郵便局振替で下記へ。

口座番号:00100-6-22077

加入者名:全国不登校新聞社

「不登校新聞」という名前を伏せた封筒での郵送を希望の方は通信欄に「個人名希望」と記入。郵便振込以外のお支払いについては各編集局にお問い合わせを。

東京編集局

〒162-0065 東京都新宿区住吉町8-5曙橋コーポ2A

TEL 03-5360-1231 FAX 03-5360-1232

名古屋支局

〒464-0036 名古屋市千種区本山町2-33-1かとうビル2F

TEL 052-759-2375 FAX 052-759-2376

大阪支局

〒537-0025 大阪市東成区中道3-14-15YMCA201

TEL&FAX 06-978-6615

CAPNAニューズレター10号

編集人 祖父江 文宏
1部 200円

発行 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404
TEL/FAX 052(232)2880



子どもを「かわいい」と思えないカッとしてつい手を上げてしまう虐待されている子が、近所にいる虐待を受けた記憶に苦しんでいるぼくは(私は)虐待を受けている育児に疲れた。私はダメな母親だ

CAPNAホットラインをご利用ください

052-232-0624

平日 AM10～PM 4 研修を積んだスタッフが対応。
木曜日は東海市(0562-36-0624)でも受け付けます。